

「老いを寿ぐ」

野口幹夫

老いは素直には祝えません。老いは美しいとは言えず、老いて立派になるかといえ、そうでもありません。見たところは、いいところなしです。しかしテーマは「老いを寿ぐ」です。何とか思案しなければなりません。

まず「能」には「老いを寿ぐ」が見つかるかと願って調べてみました。まず、能のなかの能と言われる「翁」があります。恭しく捧げ持たれて登場する白と黒の翁の面をつけ、翁の姿の神として舞い、この世の太平を祝います。翁の姿をした神が世を慶祝するのです。

結婚式の祝いに謡われることで有名な「高砂」は翁と媼が主役として登場します。しかし「老いの寿ぎ」かと思うと必ずしもそうでもありません。媼は「訪れるものは松風ばかり」と寂しい心境を述べます。老境でも共生する夫婦を祝福する言葉もありません。媼は高砂の松、翁は住吉の松。それぞれ松の精で



能「高砂」 浅見慈一
©2012 TESSEN-KAI All Right Reserved.

あると明かします。通い婚の時代です。そして大阪の住吉に帰る翁を追って、住吉まで行けば。そこに姿を現す住吉神は颯爽とした壮年の姿でした。

老いの姿が主題となる「檜垣」や「関寺小町」などは、かつての美人であった女たちの老いさらばえた無残さを訴えるものばかり。

まっとうに長生を寿ぐ能は「鶴亀」です。鶴は千年 亀は万年まで生きるとて、その舞をもって玄宗皇帝の長寿を祝うというものです。これからわかるように長寿を祝うのは下から目線で、目上の恩恵を与えてくれる人の長寿を寿ぐのです。子供たちが喜寿だ 米寿だと祝ってくれるのは、それを踏襲しているのです。

しかし客観的な横から目線では、老いが多く登場する能でも、老いは厳しいものです。その最たるものは清水さんも引用された檜山節考の原型である「姨捨」です。生存も厳しい社会から見れば、老いは厄介ものには違いありません。

20世紀の終わりころ年金が大赤字となれば、こんな狂歌が詠まれました。
『老人は死んで下さい、国のため』 また2012年には「70歳死亡法案、可決」という小説が出ました。内容は2020年に日本の国家財政が破綻に追い込まれ、ついに70歳を迎えると強制的に死が与えられるという法律が出たという話です。

しかしそんなことにはならなかった、すごい対策が出たのです。2000年に日

本で初めて導入された介護保険制度です。子育てのピークが過ぎ長寿準備者となった40歳以上の生存者が、お互いの老後の世話を、子供の手から解放し、社会が担うようにするという画期的制度です。外国にはいまだにその例はありません。これで日本に高齢者サービス産業が生まれました。今成長著しい産業です。先日 KOZOOM サロン特別編で紹介された高齢者住宅は、それを巧みに組み込んで高成長しています。

さて愚痴をこぼしても仕方ないと気を取り直して、自分の周りをみわたしても、どんどん友人や縁者が減っていきます。その中で、元気に生きながらえて、世の移り変わりを見ることができるとはやはりありがたいことです。

こうなれば自分目線で「老いを寿ぐ」しかありません。今月の KOZOOM サロン28で、お互い米寿を前にして大いに「老いを寿ごう」ではありませんか。

実は老いを寿ぐことは人間しかできません。動物も植物も、成長しその盛りを終えると、老いて静かにその寿命を終えていきます。老いを寿ぐことができるのは、人間にだけに与えられた特権、いふなれば「精神の特権」です。これまで見てきた老いの悲哀は、肉体に関するものばかりだったと気が付きます。

私は25年間継続して行っているキリスト教入門講座では、こう説きます。

「肉体は成長していくが、25歳でピークを迎え、あとは下り坂で衰えるだけ

だ。一方の精神は肉体よりも遅れて成長をはじめますが、逆にピークはなく、死を迎える時まで成長する」と教えます。

その前に認知症が来るではないかとおっしゃるかもしれませんが、大丈夫。認知症は実は精神の劣化ではなく、脳細胞を含めた肉体の劣化から起きています。精神の思い通りに脳細胞や肉体が動かなくなるだけです。すぐ忘れる、思い出せないといっても記憶がなくなってしまうのではありません、長期記憶は精神の本体に蓄えられており、その取り出し機能が肉体としての脳にあるので、認知症になるとその取り出しがむつかしくなるだけです。臨死体験をした人の話では、その瞬間すべての記憶が走馬灯のようによみがえったという人もいます。認知症になればかえって周りに気が取られることが減ることによって、自分の世界に没頭でき、精神はよりよく成長するかもしれません。

精神の成長の到達目標はシンプルです。

肉体の死で精神は 5 次元の世界に飛び立ちますが、その時までには精神が到達してほしい目標は、精神が肉体を離れて無事に飛び立てるように、願う心の準備ができていることです。いいかえればそれを願う心を持っていることです。

(逆に否定する心もあります。「人間生きてる間が花なのよ、死んでしまえばおしめえよ」です。それでは飛び立つために必要なエネルギーが生まれません。)

その心は同時に、穏やかに周りに感謝し、自分がいなくなった後もみな大切に成

長して行けることを願う心に到達していることです。

般若心経に言います。無老死尽 無所得故 心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖
究竟涅槃 老いも死も気にしないで、何も欲しがらなくなれば、心にさわりもな
く何にも恐れることはない、究極の安心の境地に達する。

仏教にくわしい人からは叱られそうな、大胆なとびとびの引用ですが、目指す精
神のおおらかさを言っているような気がします。老いの精神の目指すところは
キリスト教も仏教も同じです。



「喜寿」とか「傘寿」とか10年に一回の
お祝いは下から目線で、何かやってくれ
ればそれでよしとしましょう。

一方我々の自分目線では、毎日・毎日に
「老いを寿ぐ」ことができます。毎日の

朝の目覚めに、生きていることを祝福しましょう。そしてそれを与えてくれた周
りに感謝しましょう。すると精神の年輪がまたちょっと前進するのです。

人間は不思議な生物です。「老いを寿ぐ」ことができる宇宙で初めての存在な
のです。お互いに大いに老いを楽しみ寿ぎましょう。

(第19回 KOZOOM サロン28に向けて。)